

平成28年度 伊那市立東部中学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
(1) 真剣にねばり強く学習する生徒	1 基礎・基本がわかるまで、ねばり強く学習する生徒の育成
(2) 広く豊かな心を持つ生徒	2 他を思いやる心を持った生徒の育成
(3) 勤労を尊び仕事に打ち込む生徒	3 保護者や地域とともに育つ校風の醸成
	今年度の重点目標
	凡事徹底 あたりまえのことを 日々あたりまえに行う 1 挨拶清明 「礼を正す」 2 時間厳守 「時を守る」 3 無言清掃 「場を清める」

総合評価		
(1) 学力の向上について・・・2年生C調査では、国語は、全県平均を上回る結果であるが、数学、英語とも下回る結果であった。本年度の重点として、授業がよくなる3視点の徹底「学習問題、学習課題の提示」「個人、グループ、全体追究の場面設定」「自己の学びの振り返りの時間の確保」に取り組み、各教科会で更に焦点化して授業改善に取り組んだ。また、指導者を招き多くの全員が指導を受ける機会を4度設けてきたことで、我々の指導力も高まってきたのではないかと考えられる。次年度の課題として、学力向上に結びつく宿題・家庭学習のあり方、ドリル的な学習のあり方等の「自ら学ぶ」「学び方を学ぶ」自己教育力の育成についても検討していく。		
(2) 生徒指導に関わって・・・全職員がチーム対応により速やかに対処できている。不登校生徒へは担任、相談室職員、教頭が中心となり家庭との連絡を密にしながら、外部機関と連携して登校支援をしてきた。不登校傾向の生徒の中には、市中間教室、校内相談室に登校できる生徒もおり、教室復帰に向けた見通しがもてるまでになっている。人間関係のトラブルから悩みや不安を抱え、集団に対して不応応をおこす生徒もいた。家庭との連携を大切にしながら、チームで支援する体制を強化したい。		
(3) 楽しい学校にするために・・・生徒主体の活動となるよう、学校行事、生徒会活動、部活動など多くの場面で工夫してきた。本校の行事は伝統的なものが多く、保護者も地域も楽しみにしており、参観者も多い。部活動は活発に活動しており、各種大会やコンクールで好成績をあげてきた。5年目を迎えた「さくらプロジェクト」は、高砂中学校とのテーマソング作成という具体的な交流活動を通して、両校の絆を深めた。今後は、経費削減を念頭に、持続可能かつ、様々な形の交流形態を模索しながら、末永く交流していきたい。		
成果と課題	評価	改善策・向上策
(1)生徒、職員とも、学校自己評価での挨拶では高評価を得ている。また、地域からも高い評価をいただいている。小中連携の取組みとして、信州あいさつ運動では、小学校に出向きあいさつ運動を行った。こうした取組みも高評価の一つと思われる。	A a	○校内はもとより、地域に出ての清々しいあいさつの浸透が、地域からの評価と共に地域の方々が、東部中を支え見守っていただける応援団となっていくということを理解した上で、更にあいさつが広まっていくような活動を検討していく。
(2)生徒会活動と連携し、時間を意識した生活(チャイム前着席)に心がけてきた。また、下校時刻厳守として、毎日全職員による下校指導を実施し、生徒を送り出している。時間厳守に対する意識は非常に高くなってきている。	B b	○朝部活動の開始時間(生徒登校時間)については、家庭通知、学校だより等で徹底する(早く登校しすぎない)。教師の時間厳守についても高い意識を持ち、範を示せるよう取り組んでいく。
(3)「無言清掃の徹底」から「無言清掃の完成」へ切り替えた本年度は、意識の高さが現れた。先生方が雑音をつき雑巾がけをする姿を生徒が見て学ぶ、師弟同業の姿勢が正に研修の場である。	B b	○完全無言清掃に向け、まずは職員が率先垂範して実行できるように、師弟同業で継続して取り組む。来客対応、電話対応でも理解と協力をいただきながら、「無言清掃」を大切にしている点を、保護者、地域の方へも発信していく。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育生活	教育課程	○特色ある学校行事	○生徒が主体的に取組み、成就感、達成感を味わうことができたか。
		○特色ある生徒会活動	○「さくらプロジェクト」への取組みや日常活動での取組みで、一人ひとりを大切にする活動ができたか。
	学習指導	○生徒の実態に即した授業改善	○「分った」「できた」が実感できる授業であったか。
		○学力向上に向けた取組み	○P・C調査の分析を、授業改善に生かすことができたか。
	部活動	○主体的に取組む部活動	○生徒の意欲を大切に、具体目標を設定して活動することができたか。
生徒指導	○集団不適応、不登校生徒への対応	○集団不適応・不登校を未然に防ぐ支援策や、早期対応ができたか。	
	○人間関係でのトラブルへの対応	○人間関係でのトラブルに対し、早期発見・早期対応ができたか。	
学校運営	安全	○情報社会における安心・安全への生徒の意識向上	○インターネットやSNS端末機器の正しい利用の仕方を身につけるよう指導することができたか。
		○交通安全意関わる生徒の意識の向上	○交通ルールを守り、安全な登下校ができたか。
	地域との連携	○地域に向けた学校開放と情報発信	○学校行事、参観日、PTA講演会等に多数の参加者があったか。 ○学校だより、学年通信、学級通信、生徒指導だより、ほけんだより等で、学校や生徒の様子を家庭に伝えてきたか。
		○信州型コミュニティースクールの活用	○信州型コミュニティースクールの活用、取組みを充実させることができたか。
	研修	○同僚性に基づく積極的な授業公開	○一人一公開として、全教員が授業を公開することができたか。
○同僚性を高める職員研修 非違行為防止 教職員資質向上		○非違行為防止研修、教職員資質向上研修を定期的に実施し、修養に努めたか。	

成果と課題	評価	改善策・向上策
○伝統行事「祖父母に感謝する会」では、祖父母の皆様をはじめ、地域の方、保護者等多数の参観者が来校した。各学年の発表や、部活動の発表により、学校の様子を知っていただくことができた。また、生徒とのふれあいの時間を設け、身近な関係を築くこともでき、その様子から「感動した」という感想が多く寄せられた。	A a	○本校の特色として、「行事で生活リズムを整え行事で心を育てる」ように年間計画を工夫している。そのため、各行事の目的、つけたい力を明確にすると共に、一人ひとりの生徒の特性を捉え、主体的な活動に繋がる内容や手立てを吟味していきたい。
○「さくらプロジェクト」では、「テーマソングづくり」を手がかりとして、学校訪問による交流、テレビ電話回線による学校生活についての情報交換等、活発な交流活動を進めることができた。経費削減を視野に入れ、新たな交流の方法を模索したい。	A a	○交流の様子は、学校だよりや生徒会便り、ホームページで発信していく。学校訪問など、交流経費削減が大きな課題となるが、財源確保の活動(アルミ缶回収等)及び経費削減となる交流のあり方(震災学習等)を引続き検討していく。
○生徒による授業評価では、A・B評価が概ね80%以上であり、生徒の実態と学習問題や学習課題が合っていると考える。しかし、特定の学級、特定の教科でC・D評価が50%を超える教科が若干あり、授業改善が急務であることも事実である。	B b	○県が示す3観点については、「学び合い」を大切にメリハリのある学習形態(全体、グループ、個人追究)から、互恵的な関わりや学びとなるような追究場面を設定したい。関わりの中から、「分った」「できた」が実感できる授業を構築していく。
○C調査の国語では、知識・活用とも県平均を上回る結果となった。主語をはっきりさせ、文法的に整った文章表記ができるよう指導した点で、長文読解の力を伸ばした。数学では主に活用問題で全県との差が大きかった。しかし、計算問題など、基礎知識は大きく上回っている。英語では、知識、活用とも全県を下回る。基本的な単語練習及び、文法の理解等の練習を継続的に重ね、苦手意識を克服したい。	B b	○全国学力調査、P・C調査、NRT等の分析結果から、各教科の指導の重点を示し、授業改善を図る。朝の10分間読書の積み重ねを大切にしたり、「学び合い」(関わり)「発表」(語り合い)を授業の中で意図的に仕組んだりして、互恵的な学びに繋げるよう授業改善していく。スローラーナーに焦点を当てた授業構想として、ICTを活用した興味関心の高まり、ねらいを達成した生徒への発展的課題への挑戦等の授業改善にも取り組んでいく。
○中体連をはじめとする各種大会では、県大会、北信越大会、全国大会まで駒を進める活躍で、十分成果を上げることができた。伊那市総合型地域スポーツクラブとの連携、地域指導者の支援、保護者会との連携を得ながら、スポーツ活動運営委員会で諸問題の解決に当たることができた。	A a	○朝練習については、県教委の指針に準じながら、伊那市教委のご指導の下、生徒の状況を確認しながら実施の方向。但し、冬期の開始時間については、日の出時間に合わせた設定としたい。生徒の疲労も考慮し、生徒の主体性を大切に活動計画となるよう、顧問、保護者が連携し支援する。
○不登校支援委員会が中心となり、集団不適応・不登校傾向生徒の現状について、共通理解を図り、職員会議で全職員共有した。保管室、相談室、伊那市中間教室とも連携し、段階的な対応や関わりで教室復帰を果たすことができた生徒もいる。	B b	○不登校リスクの分析から、背景にある家庭環境、父子母子関係等、家庭に起因するものについては、SCや外部機関(子ども相談室、SSW)との連携を図り、ケース会議を行う。中2ギャップ解消のため、1～2年での学級編制替えは実施しない。
○校内相談窓口(さくら相談室：保健室)を周知した。日常の何気ない会話や生活記録から、生徒の変化に気づくよう、学年内正副担任複数目の目でチーム支援した。生徒保護者が気軽に相談できる雰囲気作りを努めた。	B b	○Q-Uを活用し、人間関係を把握できるように、専門的な研修を繰り返し実施する。道徳の時間においては、学年内で資料や価値の追究・深化を共有し、統一した内容で道徳的価値を追究していく。
○SNS利用に伴う危険性について、学年単位、学級単位で具体的な事案を基に指導した。また、参観日の折には、学年PTA懇談会でも同様の内容を提供し、親子共通の話題となるように支援した。	B b	○ラインでのトラブルやユーチューブへの動画アップ等の事案が数件発生した。具体的な事例を基にした指導を継続し、生徒間でもトラブル解決の難しさが話題となり、自浄的に働くよう指導したい。
○職員による登校・下校指導を実施し、生徒の状況を把握した上で安全指導をした。特に自転車通学生徒については、接触事故、転倒事故等数件発生してしまった事を受け、運転技術の向上も含め事故防止のための安全指導を繰り返し実施した。	B b	○地域からの「苦情」は「励まし」と捉え、その都度現場指導を徹底する。PTA校外指導部、地区安協とも連携し、ハード面での改善について、より良い教育環境推進委員会と報告・共有し、地域全体として取り組んでいく仕組みを構築したい。
○祖父母に感謝する会では約300余名、合唱コンクールでは500余名の参観者が来校した。しかし参観日、懇談会等は極端に少ない。魅力ある授業やお土産のある懇談会の企画・運営を準備する必要がある。	A b	○参観日、学年・学級懇談会の内容を早めに知らせるとともに、保護者が必要と感じている話題(SNS関係、進路関係、部活動、学習面)について扱えるような懇談会を企画していく。
○学校だより、各種通信では、タイムリーな情報発信ができています。PC入れ替えに伴い、ホームページをリニューアルし、より一層情報発信が充実するよう努める。	A a	○ホームページの更新に努め、部活動、生徒会(さくらプロジェクト)等、興味関心の高い事項についても積極的に発信する。
○読み聞かせ、キャリア教育、食育、学習支援、クラブ支援、PTA活動支援の6分野において、本校の教育目標に沿いつつ、地域が期待する本校生徒の姿の具現に向け、地域の教育力を活用した学習活動を展開することができた。キャリア教育、食育(農業体験)など、体験的な学習から、「褒め」「認められる」ことを通して、自信を持ち、自己肯定感を高めたい生徒が多かった。また、生徒と関わることや学校と関わることに「楽しみ」「喜び」があり、地域の学校に対する「思い」「協力」も強いことが感じられた。	A a	○非日常の大切さ、たとえば「思いやり」「優しさ」「気遣い」など、日常の関わりとは違った方向からの学びが、生徒の心を成長させていると思われる。そのため、できるだけ地域に出て、触れ合う活動を計画したい。その際、平日の活動では、教科学習の欠落が出てしまい、時間調整が課題となるため、授業時間確保について、調整・検討しながら進める。
○「学び合いのある学習」を研究テーマに、全校研究授業を4回実施した。特にICTを活用した授業公開では、自分の教科に生かそうと、活発な議論がなされた。また、全教員一人一公開を目標にお互いの授業を見合いながら自己の実践を振り返るよう、授業改善に努めた。	A b	○ICTを活用した授業展開では、学習ソフト「スクールタクト」の活用方法を研修し、各教科での活用方法を探りたい。
○非違行為防止研修については、「自己を振り返る」ことを目的に、毎月セルフチェックシートを用いて、飲酒運転根絶、体罰、セクハラ行為、情報漏えいの厳禁について、自戒の研修を実施した。また、他校に事例を「他山の石」として、明日は我が身の気持ちで読み合わせ研修を行った。形態としては、年代別、同性グループのグループ討議とし、意見を出しやすくする工夫をした。	A a	○一人一公開では、教科会が中心となり、参観・授業研究を深め、授業改善に活用して行く。全職員へのフィードバックの仕方について再検討したい。
		○同僚性を発揮するには、職員の雰囲気、風通しの良い職員室等、職員間の人間関係の構築が大切であり、お互いに気兼ねなく批評し合える関係がつけられるようになっていきたい。
		○教員が教員としての品格と感覚を育てることができると期待する研修を検討していきたい。